

ラーとなりましたが、そのなかから生命科学を開拓した第一世代の方たち15人を選んで、『生命研究のバイオニアたち』という本にまとめました。このなかには岡田善雄さんをはじめ、岡田節人さん、志村令郎さん、早石修さん、花房秀三郎さん、豊島久真さんほか、関西にゆかりのある方がじつに多い。そのなかで志村令郎さん（遺伝学）は京大の学生時代に、遺伝学の権威である木原均教授に向かって、「遺伝学にはもうすることがない」っておっしゃったんですって。すると木原教授は、「そうじゃない。遺伝学はこれから出発するんだよ」と諭された。つまりメンデル以後の古典遺伝学ではなく、アメリカではものすごく新しい遺伝学がはじまっている。だからそれを勉強しなさいと。戦後すぐに新しい研究の芽生えを感じ取り、若い人たちに伝えるということが、京大、阪大、神戸大という文化の中にあっただすね。

岡田 あのころは楽しかったなあ。よく皆で一緒に研究したもんです。

中村 関西における生命科学の研究は、世界でどれくらい流行っているか、どれくらい最先端に迫り付いているかなどという見方をしません。『生命研究のバイオニアたち』でご紹介した方々は、すべて面白いと思ったから研究し、しかも自分流でやってきたっておっしゃっています。岡田さんが「楽しかった」っておっしゃる通り、研究者としての基本である“好きなことをする”ということを大事にするのが関西なんです。とはいえ世界の動きもしっかり見ているのがすごい。流行っているものを追いかけて、一番には絶対なれません。自分が本当に大事だと思うことをやってこそ一番になれる。そういうポテンシャルが関西にあるということ、関西の人に知ってもらいたいですね。岡田さんはその第一世代としてご活躍されました。

岡田 当時は微研（大阪大学微生物病研究所）と伝研（国立遺伝学研究所）で、しょっちゅう交流していました。

中村 相手を蹴落とす競争ではなくって、良い仲間と一緒に頑張って競争するというのが関西の伝統であり土壌だと思います。

クラスターとネットワーク

堀井 連携によって切磋琢磨するという土壌のなかで、元大阪大学総長の山村雄一さん（故人）は、大阪大学医学部や国立循環器病センターなどを発展させ、大阪北摂地域にクラスターをつくらうという構想を立てられました。

岡田 山村さんは私が細胞工学センター長のときに阪大の総長としてこられた方で、ほんとうにすごい人でした。こういう人がおられるなら世の中も悪いことばかりじゃないと安心した覚えがあります。その山村さんの構想で、彩都が開発されました。そして奥田東さん（元京都大学総長）は、「けいはんな学研都市（関西文化学術研究都市）」の提言者。その両巨頭のもとで私も仕事をしてきました。

中村 山村さんに代表されるように、生命科学の第一世代の先生方は、ある構想をもってけいはんな学研都市や彩都をつくられました。問題はそれを次の世代がどう受け継ぎ、クラスターとして発展させていくかです。関西はバイオだけではなく、さまざまな



中村桂子（なかむらけいこ）氏

1936年東京都生まれ。59年東京大学理学部化学科卒業、64年同大学大学院理学系研究科生物化学専攻博士課程修了、国立予防衛生研究所研究員。三菱化成生命科学研究所部長、早稲田大学人間科学部教授を経て93年生命誌研究館を創設し副館長に。96年大阪大学連携大学院教授となり、2002年より現職。「ゲノムが語る生命—新しい知の創出」「生きているを見つめる医療—ゲノムでよみとく生命誌講座」など著書多数。

テクノロジーが発展するポテンシャルをもっています。だからこそ、まちを開発した後の使い方がとても重要です。もちろん千里ライフサイエンス振興財団や国際高等研究所といった、個別の受け継ぎはなされています。しかし全体としての新たな構想を打ち出すことは、次の世代の重要な仕事です。また、けいはんな学研都市と彩都は別々のものではなく、関西として両方一緒に考えなくてはならないと思います。

堀井 同感です。けいはんな学研都市と彩都のネットワークをどう組むかは、関西財界の大きな関心事でもありますから。

中村 彩都は現在開発中ですから注目されていますが、けいはんな学研都市の現状もしっかり見てほしいですね。

堀井 華やかな話にはすぐ目がいってしまいがちで…。華やかといえば、新型万能細胞「iPS細胞」の大発見をされた京都大学の山中伸弥教授も、関西と縁が深いですね。

中村 山中さんは神戸大学の出身で、あの研究は奈良先端科学技術大学院大学で行われ、その後京都大学再生医学研究所へ移りました。

堀井 そういう意味では、ひとりの人の活躍を通して、関西の学術インフラがうまく活用されているとも言えるのではないのでしょうか。

中村 山中さんは「iPS細胞」の研究を伸ばすには、ただ研究費を増額するのではなく、オールジャパンでやるべきだと言っておられます。とはいえそのコアは神戸、奈良、京都にあるわけですから、山中さんの仕事をきっかけに、大学間の結びつきは一層強くなるでしょう。財界も「iPS細胞」には大きな関心を寄せていますから、企業の研究機関とのネットワークも活性化すると思います。